

二〇一四年三月一八日(参加者二名)

鯉はねてやまずよ水の温むかと	せいじ
下萌のジャングルジムに風通ふ	"
風折れの枝が塞く道踏青す	"
囀りの異口同音にふりそそぐ	"
魁は山茶萸の黄や芽吹山	"
下萌ゆるつかまり立ちの出来し子に	有香
元気よく「ハイ」と答へて卒園す	"
春一番スカート押え髪押へ	"
ガイドする手話の指先風光る	"
有馬富士見ゆるや梅の瑞枝越し	菜々
一杓を水子へ注ぐ遍路かな	"
荒東風へ仁王双手の力瘤	"
目鼻なき亥の子地藏や百千鳥	"
梅東風の通ふ観音広場かな	満天
観音のみ手かざす丘梅真白	"
うらけしと覗く双子のベビーカー	"
供華はみな春の草花水子仏	"
夙川の土手ゆくりなく初音聞く	つくし

うららかや貨物列車はまだ続く	"
出船いま春満月の外海へ	きづな
うべなへる歌碑の心や春しぐれ	"
四阿の春陰深き亭午かな	わかば
春落葉散らして鳩の翔ちにけり	ひかり
水輪かと思紛ふ風の蘆の角	ぼんこ
囀りて森のしずけさそこなはず	よし子
奈落から仰ぐ絶景梅の丘	はく子
願掛のわらじ千足身にぞしむ	"
一溪を埋めつくして梅盛る	"

定例会の選

二〇一四年三月一八日(参加者二名)